

ミューズ No. 36 平和のための博物館・市民ネットワーク通信

発行：2016年12月

編集：山辺昌彦、山根和代、安斎育郎

イラスト：戸崎恵理子& Pegge Patten

事務局：戦争と平和の資料館ピースあいち 宮原大輔

住所：〒465-0091 名古屋市名東区よもぎ台 2-820

Tel & Fax: 052-602-4222

第15回平和のための博物館・市民 ネットワーク全国交流会を開催 宮原大輔

第15回平和のための博物館・市民ネットワーク全国交流会が、2016年10月29、30日の両日、紅葉真盛りの福島県白河市のアウシュヴィッツ平和博物館で開催されました。

会場となったのは同博物館敷地内の原発災害情報センターの多目的ホールでした。このセンターは、福島原発災害について多くのみなさんに興味を持っていただき、科学的に正しく理解していただくために、2014年5月に市民からの寄付金や市民のボランティアにより設立された施設です。

今回の交流会は、アウシュヴィッツ平和博物館や原発災害情報センターの見学、学習も兼ねたプログラムとなりました。参加者は60人、特別報告が3人、各地からの報告は9組12人となりました。アウシュヴィッツ平和博物館からは20数人の参加がありました。

交流会の冒頭で、福島プロジェクトで福

島県に滞在中の安斎育郎さんが会場に駆けつけ、山根和代さんとともにINMPの次期国際会議について呼びかけました。

特別報告の一つ目は「〈歴史を逆なでする〉博物館のこれまでとこれから」—3・11後の状況をふまえて—と題して君塚仁彦さん（東京学芸大学教育学部教授、博物館学・歴史学専攻）に講演していただきました。

特別報告の二つ目は「アウシュヴィッツ平和博物館の実践の軌跡」と題して栗山究さん（法政大学等非常勤講師）と萩原達也さん（東京大学大学院教育学研究科）のお二人の報告がありました。



erico

これらの講演の後、アウシュヴィッツ平

和博物館や原発災害情報センターの見学を行い、その後、各地から参加された方々の報告が以下のように行われました。

1日目。浅川保さん（山梨平和ミュージアム）、芹沢昇雄さん（中帰連平和記念館）、松村高夫さん（中帰連平和記念館）、寺沢秀文さん（満蒙開拓平和記念館）。

懇親会（夕食）は多目的ホールがそのまま会場となり、テーブルを並べての開催となりました。50人近くの方が参加され、博物館やセンターの方々の手によるおいしい料理をいただきました。

2日目の報告。池田恵理子さん（wamの活動報告）、関谷興仁さんと石川逸子さん（益子・関谷興仁陶板彫刻美術館）、小寺美和さん（原爆の凶丸木美術館）、蓮沼佑助さん（第五福竜丸展示館）。

最後に会計等の報告を行い、来年の交流会を立命館大学国際平和ミュージアム（京都）で開催することを確認しました。

また今後のネットワークの運営方法について、運営委員会から、会費を集めない個人・団体のネットワークとし、これまでと同様にニューズレター（日本語版「ミュージズ」、英語版“Muse”）の発行と年1回の全国交流会を開催していくこと、全国交流会は開催地の主催で開催することなどの提案があり、了承されました。

このたびの交流会の開催にあたってはアウシュヴィッツ平和博物館や原発災害情報センターの皆様大変お世話になりました。おかげさまで充実した交流会となりました。御礼申し上げます。



アウシュヴィッツ平和博物館

山梨平和ミュージアム：企画展で現代の課題（時事問題）をどう取り上げたか

山梨平和ミュージアム（YPM） 浅川 保

YPMでは、常設展の他に、半年毎に企画展を行っている。企画展は戦争や石橋湛山関係とともに、現代の課題（時事問題）も積極的に取り上げている。

この間、「原発事故・原子力発電を考える」（2013年）、「特定秘密保護法を考える」（2014年）、「日本国憲法と集団的自衛権を考える」（2015年）、そして現在、「日本国憲法と立憲主義を考える」を2016年11月末まで展示中である。

以下、現在展示中の「日本国憲法と立憲主義を考える」の概要とねらいである。企画展で現代の課題（時事問題）をどう取り上げたか、取り上げるべきか、各館での取り組み等をふまえ、ご意見、ご批判を頂きたい。

- 1 全体の構成と視点（資料1）ごあいさつ
事実の提示 比較 考える を重視
- 2 新聞記事の積極的活用（資料2）
安保関連法と立憲主義の危機
2015年9月19日の各紙等実物新聞の展示、比較
- 3 歴史的経過・歴史に学ぶ、を重視（資料3～5）近代日本の立憲主義の歩み
伊藤博文 美濃部達吉 吉野作造 石橋湛山と立憲主義の検討
- 4 国際的視点を重視（資料6）日本国憲法、今も最先端

なお、現在、YPMでは、企画展「日本国憲法と立憲主義を考える」を終え、「石橋

内閣60年、今、石橋湛山に学ぶ」を開催中です。2017年5月末まで。

中帰連、地元川越で『10周年集会』開催

中帰連事務局長・芹沢昇雄

私たち「NPO 中帰連平和記念館」は今年11月にNPO認証から10年を迎え、11月13日に地元川越の「ウェスタ川越」で『記念館10周年集会』を開きました。何時もは記念館で20~30人程度の講演会・勉強会しか開いたことがなく初めての大きな集会で心配でした。しかし、首都圏以外からも北は山形、南は熊本から200人余りの参加者で会場が埋まりました。「中帰連」を研究しているシドニー大学のクレアモント康子博士は、この集会のためにオーストラリアからご夫婦で駆けつけて下さいました。

集会は芹沢事務局長の「記念館10年歩み」の報告で始まり、元憲兵隊長だった上坪鉄一氏（「中帰連」会員）のご遺族である伊東秀子さん（元衆議院議員・弁護士）の『戦犯だった父の遺言』講演の後、今年8月に亡くなった名誉顧問をお願いしていたむのたけじさんの次男・武野武司さんに『101歳のジャーナリスト 父・むのたけじからのメッセージ』の講演をお願いしました。

休憩を挟み大西広（慶応大学教授）、遠藤美幸（神田外語大学非常勤講師）、張宏波（明治学院大学教授）、今井雅巳（当記念館副理事長・高校教師）、細川清和（当記念館理事・建築家）、石田隆至（当記念館理事・大連理工大学教員）の各氏を迎え、松村高夫理事長の司会でパネルディスカッションが開かれ、会場から活発な発言もあり好評でした。

「慰安婦」問題の“冬の時代”と wam のミュージアム運動

アクティブ・ミュージアム「女たちの戦争と平和資料館」館長 池田恵理子

2015~16年は、安倍政権が強引に安保法制を成立させてしまった中で、日韓両政府は「慰安婦」問題の「最終的な解決」のため「合意」に達したと発表しました（15年12月28日）。これは被害者の声も聞かずに強行した「政治談合」であり、被害者からは猛反発され、各国の支援者たちからも両政府は批判に晒されています。ところが政権に同調するばかりの日本のメディアの多くはこれで「一件落着」として、「慰安婦」問題への関心を失っていきました。

しかしアジア各国の「慰安婦」支援団体は共同作業を経て、16年5月、ユネスコの世界記憶遺産に「日本軍『慰安婦』の声」の登録を申請しました。「慰安婦」被害者と元兵士の高齢化が進む中、資料の収集と保存は急務だからです。wamはこの日本委員会の中核を担ってきたため、産経新聞や右派の歴史家、右翼団体などから名指しの批判や中傷を受けるようになりました。10月上旬には「朝日赤報隊」を名乗る者から「歴史展示物を撤去せよ」という爆破予告の脅迫状まで届きました。wamではこのような攻撃の背景にある“言論テロ”とも言える状況への抗議を産経やメディア各社に送り、警戒を強めています。幸いその後に危険な兆候は出ていませんが、犯人は不明のままです。

またwamでは2015年度から、集積した資料を選別・体系化して活用しやすくするためのアーカイブ事業に着手しています。

これには他言語への翻訳者や映像・音声資料データの専門家、作業と保存のためのスペースも必要になるため、人材の確保と募金活動を始めました。同時にこの間、韓国、台湾、中国に新たな「慰安婦」資料館が次々と開館し、wamからの資料提供や支援、協力が求められてきました。そこで2017年4月1日にはwamがアジアの「慰安婦」資料館に呼びかけて、第1回「慰安婦」博物館会議を開催することにしました。

2016年7月からの1年間は、ビルマでの「慰安婦」被害を伝える「地獄の戦場 ビルマの日本軍慰安所～文玉珠さんの足跡をたどって」展を開催しています。17年7月から開催予定の日本人「慰安婦」展に向けた聞き取り調査や準備作業にも取りかかっています。

日本国内での「慰安婦」問題の否定と無関心の風潮に抗して、wamのミュージアム活動はますます忙しく盛り上がってきた今日この頃です。

4月1日の第1回「慰安婦」博物館会議の案内チラシをご希望の方は、池田恵理子 (erimomo@jca.apc.org) までご連絡ください。案内チラシをご希望の枚数分、お送りします。」

東京大空襲・戦災資料センター

山辺昌彦

2016年の東京大空襲・戦災資料センターの主な取り組みを紹介します。

2016年7月10日に『東京復興写真集 1945～46 文化社がみた焼跡からの再起』（山辺昌彦・井上祐子編 勉誠出版）を刊

行しました。これは東方社の後継団体である文化社が1945年11月から46年11月にかけて“東京の街と暮らし”をテーマに撮影した写真を収録した写真集です。

2016年3月10日『空襲被災者運動関係資料目録1』を刊行しました。これには東京・神奈川における戦災遺族会運動や戦災傷者運動の資料目録を収録しました。9月18日には『空襲被災者運動関連資料目録2 全国戦災傷者連絡会『傷痕』記事総目録』を刊行しました。

2016年第一回特別展「ぼくと戦争 小池仁戦争体験画展」を2階会議室で2016年2月24日～4月10日の会期により開催しました。東京大空襲を描いた油絵の大作7点と小池仁氏が自費出版した『戦争をすることはできない本当の理由—小池仁戦争体験画・文集』の原画30枚などを展示しました。来館者は1201人でした。

『東京復興写真集』の出版を記念して、2016年第二回特別展「文化社が撮影した敗戦直後の東京」を2016年7月27日～9月4日の会期により2階会議室で開催しました。参加者は2082人でした。2016年7月31日に特別展記念講演会を開催し、井上祐子「文化社の足跡と文化社写真の歴史的意義」と山辺昌彦「文化社の写真に見る東京復興」の2本の講演がありました。

2016年3月6日にティアラこうとう（江東公会堂）の大会議室で「東京大空襲を語り継ぐつどい」を開催しました。内容は、米田佐代子さんの講演「想像力としての戦争体験—いま、「声なきよびかけ」にこたえる—」、西尾静子さんの東京大空襲体験談「東京大空襲は6歳の誕生日だった」、きたがわてつさんの歌「日本国憲法前文」な

どで、参加者は330人でした。

2016年夏休みの特別企画「みんなで学び、伝えよう！東京大空襲」を江東区教育委員会の後援を受けて、2016年8月12日～15日の午後2～4時に2階会議室で開催しました。参加者は511人でした。

第五福竜丸展示館

学芸員 蓮沼佑助

平和のための博物館・市民ネットワーク全国交流会にて都立第五福竜丸展示館の近況について報告させていただきました。各地の平和博物館の皆様の報告やその後の交流の中で感じたことを踏まえ、報告の要旨をまとめます。

第五福竜丸展示館は2016年で開館40年を迎えました。また今年には第五福竜丸建造70年という大きな節目を迎えます。現在、第五福竜丸展示館では特別展「この船を知ろう―第五福竜丸建造70年の航跡」を開催しています。20年とされる木造船の耐用年数をはるかに超え、現存する船は極めて稀です。平和遺産であると同時に産業遺産としての意義も重要です。

建物の老朽化や船体の傷みといった課題もありますが、より広く来館者に第五福竜丸の被災や戦後の核実験、水爆の時代の脅威について関心を持ってもらえるよう伝え方の工夫が必要だと考えています。多言語化や映像や音声を用いた展示など、あらゆる人に見やすい、理解しやすい展示づくりが重要な課題です。

来館者との対話は、退職した教員などで作るボランティアの会のメンバーが担い、

来館するすべての団体にガイドを行っています。昨年は福竜丸の母港・静岡県焼津で元乗組員の話聞くなど研修を行いました。被ばくした福竜丸が着岸した港や久保山愛吉さんのお墓など、実際に現地に足を運ぶことでより理解が深まることを実感しました。第五福竜丸展示館も、実物の船に触れ学ぶ機会として活用されることを期待しています。

開館から3年半を経て

一般社団法人 満蒙開拓平和記念館

副館長・専務理事 寺沢秀文

満蒙開拓に特化した全国で唯一の記念館として開館してから3年半。民間運営施設として多くの課題、困難は抱えるも、多くの皆様のご支援、役員、スタッフやボランティアグループの皆様の団結等によりどうにか維持することが出来ています。昨年(平成27年)10月からの1年間の主な出来事等を時系列に見ると以下の通りでした。①澤地久枝さん講演会の開催(27年11月3日)、②中国養父母展の日本国内開催(同11月～12月)、③中国養母を招いてのフォーラムの実施(同12月)、④元開拓団員や中国養父母の証言聞き取りビデオ集「それぞれの満州・パート2」の完成(28年3月)、⑤旧満州・ソ満国境近くの宝清県の旧開拓地等への訪問(同9月)、⑥出張記念館「北信サテライト」の開催(同9月19日)、⑦開館以来の来館者数が10万人を突破(同11月7日)、⑧天皇・皇后両陛下がご来館(同11月17日)。

満蒙開拓という特殊なテーマに特化した山の中の小さな記念館ではあるものの、平

成 25 年 4 月の開館以来、全国各地から年間約 3 万人の来館者にお越し頂いています。

4 年目に入り、流石に来館者数も減少傾向が見られ始めた矢先、去る 11 月 17 日に天皇・皇后両陛下が「強いご希望」により満蒙開拓平和記念館にご来館され、改めて満蒙開拓に対する社会からの関心を高めてもらうきっかけとなりました。しかし、このご来館のことは大手紙等での扱いも小さく、NHKの全国ニュースでも全く取り上げられなかった等は、単にニュースバリューが無いということよりも、「不都合な史実」を語り継ごうという当館の存在自体が「不都合」なことと一部の方面等からは受け止められているからかも知れません。今後も多難な運営が続きます。

ピースあいち

設立 10 周年で多彩な展示会を開催予定

事務局長 宮原大輔

戦争と平和の資料館ピースあいちは 2007 年 5 月 4 日に開館し、2017 年には 10 周年を迎えます。10 周年の節目にあたり、さまざまな企画を準備しています。

企画の一部は有料（入館料のほかに観覧料が必要）です。また詳しい時間などもチラシやホームページでご確認ください。

◆特別企画 丸木位里・丸木俊「原爆の図」と市民が描いた「原爆の絵」展
期間 2017 年 2 月 14 日（火）～3 月 25 日（土）

丸木位里・丸木俊の「原爆の図・第 1 部 幽霊」（原爆の図丸木美術館蔵）と広島の子が描いた「原爆の絵・ヒロシマを語り継

ぐ」から 26 枚の絵（複製パネル、広島平和記念資料館蔵）の展示。

関連イベント

《丸木美術館学芸員によるギャラリートーク》2 月 18 日（土）

《映画「ひろしま」自主上映会》関川秀雄監督、1953 年製作、104 分。1 回目 2 月 18 日（土）、2 回目 2 月 19 日（日）

◆「名古屋城が焼失した 5 月—『名古屋大空襲』展」

期間 2017 年 4 月 11 日（火）～5 月 25 日（土）

1945 年 5 月 14 日の米軍による名古屋市街地北部空襲で名古屋城は焼失しました。明治以降の名古屋城の変遷と軍都名古屋で名古屋城の果たした役割を振り返り、米軍資料から米軍の名古屋空襲の目標と目的は何であったのかを明らかにします。

◆「戦争と平和の資料館ピースあいち 10 年のあゆみ」展

期間 2017 年 4 月 11 日（火）～5 月 25 日（土）

年表と資料でピースあいち 10 年のあゆみを振り返ります

◆「知られざる沖縄の真実—ハンセン病患者の沖縄戦」展

期間 2017 年 5 月 30 日（火）～7 月 1 日（土）

1931 年に制定された「らい予防法」により患者の絶対隔離政策が全国で実施され、戦場となった沖縄ではハンセン病患者は壮絶な体験を強いられました。その実態から

沖縄戦を考える企画です。沖縄愛楽園交流会館の協力を得て開催いたします。

◆特別企画「いわさきちひろ展 ―世界中の子どもみんなに 平和としあわせを―」
期間 2017年7月11日(火)～8月31日(木)

平和を願い命の輝きを描いたいわさきちひろ。本展では色彩豊かで優しさあふれる代表作品のほか、ちひろが平和への願いを込めて作り上げた絵本『私がちいさかったときに』と『戦火のなかの子どもたち』から構成された平和のパネルを展示します。

関連イベント

≪講演会「母いわさきちひろを語る」≫講演 松本猛氏、7月23日(日)

「85回を迎えたピースあいち研究会」

ピースあいち 丸山 豊

ピースあいちには、ボランティアが自ら学ぶ場としての研究会があります。毎月20名前後が集まり勉強する自主的学習会、これが「ピースあいち研究会」です。2009年1月に発足しましたが、7年目の本年11月例会で、85回を数えました。

本研究会には特筆すべき大きな特色があります。いわゆる著名な研究者を招いての「学習会」「研究会」は巷にあふれていますが、それらの多くは受け身のレクチャー拝聴が中心です。しかし「ピースあいち研究会」では自分たちで課題を発見し、意欲的にその問題を解決していくスタイルを大事にしてきました。ボランティアによる「戦争と平和に関する」学び直し、学び合いで

あり、これは一つの市民歴史学習運動といえます。

また「学びの意義」という教育の本質をここに見ることができます。また学ぶことが「平和を創造し歴史を支え動かす力」になる、とボランティアが自信を深めていることもあげられます。ピースあいちの展示内容、企画を支えてきたことはいまでもありません。

研究成果は、「ピースあいち研究会誌」(第2号)として2017年1月発行予定です。

立命館大学国際平和ミュージアム

専門委員 山根和代

「絵葉書にみる日本と中国:1894-1945」という展示が、2016年10月1日～12月11日に開催されました。

開催趣旨：日清戦争から第二次世界大戦終結までの約半世紀、日本は中国大陸への侵出を進め、やがて侵略戦争を起こして敗北するという結果に終わりました。この間、日本と中国は互いをどのように捉えていたのか、世界はこの時期の日本と中国をどう見ていたのでしょうか。日清戦争、日露戦争、義和団事件、21か条の要求、パリ講和会議、満州事変、日中戦争などの日本、中国に関する歴史的出来事が絵葉書及びその他の資料にどの様に描かれていたのかを追いました。

10月29日には二松啓紀(ふたまつひろき)氏(立命館大学 社会システム研究所 客員研究員)によって「絵葉書で旅する大日本帝国―日中関係と日本人―」という講演会が開催されました。また11月26日には映画

『蟻の兵隊』上映会と池谷監督のトークイベントがありました。

9月14日から23日まで15か国から22名の大学院生が集まり、「心の支配」(英語では“Enslaving the Mind”)をテーマに、REKEI PAX SCHOOLが開催されました。指導プログラムを通じて刺激を受けた参加者は4つのグループに分かれ、それぞれ創造性豊かに展示と平和のゲームの創作に努めました。その他多くの取り組みがありましたが、詳細はHPをご覧ください。
<http://www.ritsumei.ac.jp/mng/er/wp-museum/>

平和資料館・草の家：高知

事務局員 安部愛

夏の間6月25日から8月21日にかけては、毎年恒例の平和文化行事「2016ピースウェイブ in こうち」を開催し、今年も多くの皆様のご支援・ご協力のもと、「第34回平和七夕まつり」(6/25~7/31)、「第38回戦争と平和を考える資料展」(7/13~18)、そして「第33回平和美術展」(7/5~10)、「第33回平和映画祭」(8/15)、「第33回反核平和コンサート」(7/12)、「第20回ピースアクションユニセフのつどい in こうち」(7/16)、等々各団体・個人の企画・運営する10余の行事を無事終えることができました。しかし、「第10回掩体コンサート」(8/21)は、8月13日に高知市のホームページに「高知県内の市町村の小中学校を爆破する」といった内容のメールが届き、市の教育委員会の指示で中止することとなりました。草の家としてもこうした無差別で

卑劣な行為に断固抗議するものです。

また、今夏も県内の小中学校から要請を受け、草の家館長はじめ副館長、学芸員、研究らが平和の語りべ(講師)として出かけてきました。草の家所蔵資料の遺品ら、あるいは戦争遺跡も出番を得て“平和の道具”として活躍しました。

9月25日には、「武力で平和はつくりえないピースアクション高知」が、高知市藤並公園で開かれました。6組のライブ演奏、学生やママの会等3グループから平和のメッセージが寄せられ、沖縄や原発をテーマにしたパネル展示など行いました。参加者は約40名でした。

11月23日には、「シンポジウム沖縄から日本を考える」を開きました。沖縄問題を考え発信している大学生や社会人が中心のサークル「橋人(はしんちゅ)」を招いて、彼らが今夏東村・高江に行って直接触れた現状を「高江の今、日本の現在(いま)」として報告した後、「フォトランゲージ」という手法でワークショップを行いました。参加者は約45名、久しぶりに草の家ホールは満員に。会場では「やんばるの森の小さいのち」という写真展もあわせて開かれました。

来年は、第21回戦争遺跡保存全国シンポジウムが高知で開かれます。つい先日実行委員会が発足されました。また、今年6月にはじまった「ビキニ国賠訴訟」と並行して元マグロ漁船員たちの証言集『ビキニ被災ノート』(2017年3月1日の発刊)の編集作業が進んでいます。「ビキニの海は忘れない」(仮称)展も2017年4月に開催予定です。2017年も盛りだくさんになりそうな草の家です。その他の行事について、詳細

等は草の家のブログ等ご覧ください。

<http://blog.livedoor.jp/kusanoie/>

ナガサキピースミュージアム

Nagasaki Peace Museum

ナガサキピースミュージアムは、被爆地ナガサキから世界へ「平和を発信する基地」として生まれた小さな美術館・博物館です。

1995年、終戦及び被爆50周年の際、長崎市出身の歌手さだまさしの提唱に広範な市民が賛同して『ナガサキピーススフィア員の火運動：The Nagasaki Peace “Gem Fire” Movement』が組織されました。未来の子どもたちに平和な地球を贈ろう！とのポリシーで、具体的には「平和に関する情報を発信する」、「平和を願う市民のネットワークを構築する」の2点が目的です。

その活動の拠点となるのが『ナガサキピースミュージアム』で、2003年、長崎市の海の玄関口、長崎港松ヶ枝国際観光ふ頭の一角に建設しました。建設及び運営費用は全て市民の寄付募金中心で、活動も会員・ボランティア組織の市民が支えています。

活動は、ミュージアムの企画展が中心ですが、企画展のテーマは「戦争・原爆」に拘ることなく、むしろ、世界に広がる「飢餓・難民・人権・差別・医療・教育・環境」などを積極的に取り上げています。入館無料・使用料も無料で広く市民に開放しており、長崎県の内外だけでなく、アメリカ・カナダ・オランダなど海外からの希望も受け入れています。

このほか、誰にでもできる平和活動第一歩として、日本国憲法の「戦争放棄」に由

来する小さなアクセサリー「みどりのせんそうほうき：SENSOU HOUKI」作りを提案し活動を広げています。また、活動の全分野で、写真家北川孝二さんの作品「世界の子どもたちの笑顔」を使用し、「この笑顔を守るためにあなたに出来ることは？」と呼びかけ、考えたことを実行に移すことを求めています。

「ピース」を標榜するミュージアムは、とかく暗いイメージがありますが、ナガサキピースミュージアムは、明日へ向かって元気な気持ちで歩みだせることを念頭に、全国800人の会員・ボランティアと平和を願う広範な市民に支えられ今日も力強く歩んでいます。

ひめゆり平和祈念資料館

学芸課 古賀 徳子

2016年4月、沖縄戦で亡くなったひめゆり学徒と教師の慰霊碑「ひめゆりの塔」の建立から70年が経ちました。この機会に、6月1日～9月30日まで、資料館ロビーで「写真でふりかえる『ひめゆりの塔』の70年」を展示しました。1946年4月5日の建立以来、十字架の納骨堂の建設、乙女像の設置、1957年の新しい「ひめゆりの塔」の建立、2009年のリニューアルなど、「ひめゆりの塔」が大きく形を変えてきたことに驚き、関心を持ってくださる来館者が多くいらっしゃいました。

夏休み特別企画として「元ひめゆり学徒の戦争体験講話」（8月11・13・14日）と「次世代の平和講話」（8月23～28日）を開催しました。新崎昌子証言員、仲里正子

証言員、島袋淑子館長が戦争体験講話を行い、3日間で341名の参加がありました。また、6人の職員（学芸員・説明員）が平和講話を行い、6日間で305人が参加しました。

2015年12月から開催中の戦後70年特別展「ひめゆり学徒隊の引率教師たち」の展示を一部新しく追加しました（2016年10月1日）。生き残った教師の戦後、「戦争へひきずられていった罪」（仲宗根政善『石に刻む』）、展示に寄せられた来館者の声を紹介しています。

また、英語版ガイドブックの刊行、アニメ「ひめゆり」DVDの発売、さらに「教員のための展示ガイドツアー」、「教員向け講習会」、教職員の初任者研修、十年研修の受け入れなど、学校の先生方を対象とした研修を多く実施しました。

Tel:098-997-2100 Fax:098-997-2102

<http://www.himeyuri.or.jp>

海外の平和博物館ニュース

「平和のための博物館国際ネットワーク（INMP）」通信の日本語版をご覧ください。下記のHPで読むことができます。

<http://www.museumsforpeace.org/news/newsletters.html>



鳥と木の魂：Birds & Trees Spirit
by Pegge Patten(アメリカの画家)

お知らせ

第9回国際平和博物館会議 2017年4月10日～13日

イギリス・北アイルランド ベルファスト

メインテーマ

「平和のための“生きた”博物館としての都市」です。日本からは25名が参加の予定です。参加意欲をお持ちの方はINMP日本事務局にお問い合わせください。

〈INMP日本事務局〉

「平和のための博物館国際ネットワーク」の日本事務局は、安齋科学・平和事務所（ASAP）に置かれています。月・水・金の午後13時～17時30分オープンしています。電話：075-741-7267、FAX:075-741-7282